

Per Crucem Ad Lucem



十字架を通過して光へ

東北ヘルプ ミニ・ニュースレター

2018年イースター号 「8年目の被災地」特集

目次

- はじめに 1～2頁
- 証人として立つ(いわき食品放射能計測所) 3～4頁
- 共にいること・一緒にいること(福島聖書教会 岸田誠一郎先生) 5～6頁
- 不信感が広がる中で、つながりを広げて(キッズケアパークふくしま) 7～8頁
- ハートニットが8年目を迎えるにあたって 9～10頁
- 津波の被災地で、恵み豊かな神様の働きを(恵プロジェクト) 11～12頁
- 「8回目」の3・11を迎えて(「ライフワークサポート響」阿部泰幸さん) 13～15頁
- おわりに 16頁

はじめに

2017年度が終わろうとしています。3月になると、世間では「7年間」の被災地の変化を特集する番組や記事が多く配信されました。その中で、私たちは少しの戸惑いを覚えていました。

「8年目の被災地に、どうやって向き合ったらよいのだろう」

という戸惑いでした。

7年間の日々は、実に濃密なものでした。多くのプロジェクトが行われ、完結しました。たくさんの方々との出会いがあり、そして別れもありました。全世界・全国から、本当に大きなお支えをいただきました。2018年2月時点で、東北ヘルプだけでも、累計5億円を超える献金をお預かりし、支援に用いさせていただいたのです。でも、今、多くの支援者が、経済的・肉体的な理由から「撤退」をしています。

いつも気を付けなければならないと覚えていることがあります。私たちは「被災者」を“利用”してしまうかもしれない。「火事場泥棒」になってしまうかもしれない——という恐れを、私たちは、震災直後からずっと、抱いてきたのです。「人のために役立っている」という実績をもって自己実現をしよう、という誘惑は、あらゆる支援者に、いつも、静かに忍び寄るのです。

「8年目の被災地に、どうやって向き合ったらよいのだろう」

この問いは、3月の声を聞くころ、深刻なものとなってきました。答えを探すために、どうしたらよいか。私たちは、自分たちに与えられた強みを活かすことにしました。私たちの強みは、キリスト教団体であるところに由来します。キリスト教団体は、教会を拠点として、「現場・現地」に**密着**しています。そして教会のネットワークをたどって「全世界・全国」と**直結**しています。この「密着と直結」こそ、私たち「東北ヘルプ」の核心です。これを活用して、私たちは「8年目の被災地」をどう見たらよいのか、具体的に探ることにしました。そのために、岩手から福島に至る広範囲にわたって、今も活動を続ける支援者の方々の声を聴く旅をしました。その成果が、今回のニュースレターとなっています。

* * *

旅を続けながら、3月11日を迎えました。今年も東北ヘルプは、宮城県の気仙沼市・登米市・南三陸町・石巻市・仙台市で行われた教会関係の記念行事を応援しつつ、①仙台市内の曹洞宗寺院・昌林寺でコンサートを行い、②石巻クリスチャンセンターで「テゼ」の祈りの集いを行い、③郡山市にできた「WelfareCafe」開所イベントを行い、④南三陸町の災害公営住宅集会室と石巻「お茶っこハウス」教会で慰問コンサートを開催しました。

上記①の会場を提供して下さった仙台の和尚様は、②の石巻に参加くださり、聖書の言葉を歌い祈る時を共に過ごして下さいました。こうした交流の豊かさの中に、7年間の働きの実りを体感できたのだと思います。また上記③の準備の中で、「3a! 郡山（被ばくに悩むお母さんたちのフリースペース）」を「WelfareCafe」へと発展させた野口時子さんは、「新しい一歩が、これまでの活動を裏切ってしまうまいようにしたい」と、やはり「8年目の被災地」への戸惑いを語っておられました。

* * *

17ページにございます献金の感謝報告の通り、東北ヘルプへの献金金額は減少傾向を続けていますが、献金件数は増えています。戸惑う私たちを、包み込むようにお支えくださる方が、まだまだ大勢おられること。そのことに神様の守りの御手を感じています。皆様とご一緒に、このイースター号を通して、「8年目の被災地」に向き合う備えを整えることができますことを、深く感謝しています。

(2018年3月19日 川上直哉 記)



2018年3月11日
石巻クリスチャンセンターにおける
「テゼ」の祈りの集い
(最前列におられる3名は、ご僧侶です)

2018年3月10日 仙台市若林区の
曹洞宗昌林寺（津波被災寺院）における
玉城ひろさん・溝下創さん
ボランティアコンサート



東北ヘルプは、仙台・福島 of 諸教会と合同で食品放射能計測所を設置し、運営しています。現在二つの教会と一つのセンターに計測所が稼働しています。2018年3月8日（木）、福島県いわき市内にある日本基督教団常磐教会内に設置された「いわき食品放射能計測所」を訪問し、牧師で所長の明石義信先生に「8年目の被災地」について、お伺いしました。（聞き手：川上直哉）

証人として立つ（いわき食品放射能計測所）

——この7年間を振り返って、印象的なことは何でしょうか。

私は、2012年4月に常磐教会に赴任しました。赴任してすぐ、この地に生きる多くの人々が「ここでもちゃんと生きていたい」という強い思いをお持ちであることに、強い印象を覚えました。その印象を足掛かりに、「被災地の中でも、同じように生活ができる」あるいは「ここで子どもを育てることに喜びを見つけれらる」という方法を探すことが自分の使命なのだ、と思いました。2012年当初は、みんなに「笑い」が足りないと思いました。「笑ってはいけない」という雰囲気があったのです。「普通さ」が、「ここならではのもの」が、「この場所の意味」が、何とか確保できればいいのに、と思いました。そして、いつ頃だったでしょう、そういう「普通」を「安全に」作り出したいと、願うようになったのでした。

——「8年目の被災地」に立って、計測事業をどのように評価されますか？

この7年間、計測所と連携したいわき市内の保育園が、食品をはじめ心配されるもの全般について、計測をして公開してきました。最近そのことに、高い評価をいただく機会がありました。保護者からの反発を考えるから、通常、保育園などでは、放射能そのものに対して、どうしても及び腰になる。でも、発災後の最初のところできっかり寄り添うことができなければ、後で後悔することになるのだと思います。7年経って、原子力災害の被災地で計測所は重要な意味を持つ、ということが、今、いよいよ、はっきりしてきていると思います。



明石義信先生。指している先が、計測器。

実際、計測所は、本当に役に立ちました。スクリーニングができ、マイクロスポットも見つけられる。100ベクレルを超えた数値は、保育所を通じて保護者にお知らせしています。7年間様々なことに翻弄されながら、人々は、とても強くなりました。そうした数字を知らされても、パニックになる心配は、もう、まったく要らないと思います。すぐそこに、あちらこちらに、激しく汚染された土壌があります。そのことを、この地に住む人々はみんな、何となく、知っているのです。そうした中で、お一人お一人、自分たちの生活を再建してきた7年でした。そこに培われたリテラシーは、信用できると思います。

——これからの課題は何でしょう。

ここで生きていいんだと思える環境が整い、不安なく子育てができ、土地を受け継いで生きていく——それは、どこに住む人にとっても、当たり前のことなのだと思います。でもその当たり前のことが、ここでは、簡単には、できない。だから、私はここに住み続けたいと思っています。そうして初めて、私もその課題を自分の重荷として、皆さんと一緒に引き受けることができるからです。そうして初めて、ここにある矛盾を指摘することができる。そういう生き方を確保したいと思います。そして、そのための知恵・その権利を探し続け、積み重ねていきたいのです。そうしていつか、今ここに広がる問題の本質も、明らかになるでしょう。

「ここで子育てをしたい」と皆が思う所までは、なかなか、到達しないかもしれません。被害は甚大なのですから。でも、みんなそれぞれ違う命があって、その命が、確かに今、この地にあるのです。甚大な災害を蒙ったのですが、それでも、ひとりひとり、ちゃんとその命を生きていけるはずです。私は、そう思いたいのです。

故郷を破壊され怒りを覚える人々が、ここに生きています。その理不尽な現実の証言者たり得たいと、私は思うのです。「たとえ汚染されているとしても、これほどに福島の自然は美しい。被ばくしてもここから離れたくない、という福島の人々がいることは、よく分かります」と、福島の被災地を視察したドイツ人が言っていたことを思い出します。故郷が美しいということ。それを大切にしたいと思うこと。その当たり前のことが、前提から壊されてしまったことを、深刻に思っています。

今私は、「だまされる側」に立っていようと思います。東京では受容不能な環境が、ここに放置されています。その理不尽を引き受ける側にいること。基地の問題と同じく、ここに差別の基本構造が露出しています。私は、その証言者として生きています。証人として、ここに生きています。怒りを抱え込みながら……。 (了)

震災直後、福島県の諸教会は、福島県内の教会は、ネットワークをつなぎ合わせて「福島県キリスト教連絡会(略称 FCC)」を結成しました。今、この FCC の中に「放射能対策室」が設置され、「放射能問題学習会」が定期的開催されています。2018年3月7日(水)午後、その責任者である岸田誠一郎先生(福島聖書教会牧師)に、「8年目の被災地」をテーマにお話を伺いました。

(聞き手：川上直哉)

共にいること・一緒にいること

福島聖書教会 岸田誠一郎先生

——この7年間は、どんな日々だったでしょうか。

2011年3月の時点では、大阪の教会に牧師として奉職していました。被災地の現実を知らされ、福島で働く先生方のお役に立てることがあればと願い、2014年3月一杯で教会の牧師を辞して、5月に福島市に引っ越しをしてきました。以来、「教えてください」という思いで過ごしています。

外から見える福島と、中で見える現実との間には、ずれがあり、意外に思うことも多くありました。私が来たのは、学校で運動会が再開されるかどうかという、福島県内の一般の人々の生活の変わり目の時でした。人々はもっとはっきり「脅威」に接しているのだろうと身構えていたのですが、案外「普通」でした。



ただ、街を歩くとモニタリングポストがあり、除染をした記録を示す立札がありました。阿武隈川の公園では「1時間以上遊んではいけない」「公園で遊んだら手を洗うように」という立札がありました。そうしたものに会う度「汚染地帯なんだ」と、引き戻される感じがしたものです。表面的には「普通」だけれど、公園に行けば「数字」がある。ここは福島だと、改めて知らされた思いがしました。

こちらに来てすぐ、計測を始めました。するとすぐ、まだらにあるホットスポットの存在を実感するようになりました。ほとんどの人はそれを知らない、という中に生きていることにも、気づかされるようになりました。

——「8年目の被災地」の課題は、なんででしょうか。

この地で生活する中で、自分自身、いろいろ変わったと思います。自分で判断するしかない現実の中で、考え続けました。水一杯飲むことも、最初は戸惑いながら、確認しながらでなければできなかったのです。少しずつ計測をして確認しながら、生活に慣れていきました。最初の緊張感は、気づくと緩やかになり、でも揺り戻しもあり、いいもの・悪いものの区別をどうするか、ずっと自分の課題となっています。ホットスポットには気を付け、そうでないところは大丈夫だと判断していく、その知恵を持つ意識を高めていかなければならないと感じています。

福島市の観光名所・花見山のことが気になっています。毎年計測しに行き、もう三年になります。去年も、その放射線量はかなり高かったです・・・今年の春はどうなのでしょう・・・そうした中で、人々がどう花見をしているかを見てきました。去年の春、保育園などの児童が来ていました。数値は「 $0.3 \mu\text{Sv/h}$ 」を超えていました。「子どもがここにいていいのか」という思いを込めて、それを見守っていました。

どう対応したらよいか悩みながら、よいもの・悪いものを弁別して生き続けることが、今の課題だと思います。確かに「悪いもの」は少しずつ減っています。それでも、すべてが「よい」とは言えない現実が、確かにここにあるのです。

——「福島」とは、先生にとってどんな場所ですか？

とりわけ、福島県民の人柄は、素晴らしいと思っています。穏やかで、まじめで、好きです。もうひとつ、自然の素晴らしさがあります。確かに、その自然には苦味がある。それでも「なんと美しい」と感動し、そして怒りを感じるのです。山登りを趣味としてきたこともあると思いますが、私自身は山に癒されています。自分の居場所を自然の結びつきの中に感じているのです。

福島の方に「県外から来た」と言うと、「いつまでいるの？」と聞かれます。復興・除染関係の仕事で来ていると想像なさるようです。そんなとき、「自分はここに、ずっといさせて頂きたい、と思っています」と答えると、相手の人は姿勢を正し、深く頭を下げて、本当に感謝してくださいました。そうした経験は、一度ではないのです。「みんな去っていくのに、先生は来てくれる」と、教会員にも言われました。「先生は福島に住むのですね」と言ってくれた牧師もいる。「共にいる」「一緒にいる」ということの大切さを、私はここで知らされたと思います。何もできなかったとしても、ここで生活を続けるということが、一つの事実として、意味を持つのだと思っています。

神様の導きを感じて違和感なく住んでいる自分ですが、それでも、ここで生きる以上は、放射能を無視することはできない。だから、知ってほしい。逃げるためではなく、ここで折り合いをつけて生きているために、知ってほしい。そのために、学習会を活用したい。広くそこに人を招きたい。考える材料を提供し、意識向上に資したい。そう思っています。(了)

福島市内の諸教会が力を合わせ、子どもたちが安心して遊べる場所を作り出す「キッズケアパークふくしま」の動きが、NPO 法人格を取得し、新しい展開を示そうとしています。その活動の中心におられる野村治先生（福島いずみルーテル教会牧師）と栗原清一郎さんに「8年目の被災地」とどう向き合っておられるか、お伺いしました。（聞き手：川上直哉）

不信感が広がる中で、つながりを広げて

——7年間の被災地の日々と、支援活動について、どんな印象をお持ちでしょうか。

「短くて長かった。あっというまだった。」と思います。2013年3月に高等学校の校長を辞して、福島市内の教会ネットワークの皆さんと支援活動を始めました。最初は、みんなで話し合っ、いろいろなことをしました。仮設訪問、物資配布、メサイア合唱、などやってみて、そのうえで、放射線被ばくを恐れて子どもたちの体力が落ちている、お母さんたちが外で遊ばせられない、安心して遊べる場所が必要だ、と話が進み、「キッズケアパーク」という活動が、2013年7月に始まります。企業を回ったけれど、資金は、なかなか集まりませんでした。それでも2014年6月に初めて、私立幼稚園協会から遊具を借りて、北信カルバリーチャペルを会場に「こども遊び場」を始めました。第二回目はいずみルーテル教会で行いました。すべてボランティアで始めたのです。それ以来ずっと続けています。

2015年から、毎月一度のペースとなりました。高校で培った人間関係を活かし、ボランティアを集めることができたことも幸いでした。献金も最初は聖書協会が、その後は日本ルーテル教団を中心に、そしてドイツ福音ルーテル教会連合など多くの団体が協力くださり、個人、教会、婦人会など、支援のすそ野も広がったのです。2015年5月には遊具も買うことができました。遊具を置く場所についても、よい場所を安価に借りることができました。神様に整えられたと感じています。

——「8年目の被災地」を、どのように見えていますか？

「8年目」ということでは、それぞれの事情の中で「逃げられなかった」人達のことを考えています。小学生以下の3万人の福島市民の内、3千人が保護者と一緒に避難しました。でも大多数は、経済的な理由などによって、逃げられなかった。そして、福島市以外から避難してきた人々も流入してきて、福島市の子ども的人数は戻りました。そうした人々のために、8年目の私たちの今がある、と思っています。除染も進みました。でも、問題がなくなったわけではありません。「福島市は、本当に安心して子育てができる、よい場所なんだ」と、していかねばならないと思います。それは残らざるを得なかった人たちのためにです。

私自身のことで言えば、除染したところで生活していますが、一日「1.5マイクロ

シーベルト」の累積被ばくをしています。でも郊外に行けば、その倍以上になる。そうすると、「年間1ミリ」という基準内には、収まらなくなるのです。市内は市の努力によって除染の効果が出てきました。でもそれは市街地と公共施設に限られています。それ以外の地域は、そうした恩恵に浴しているとは言い難いのです。たくさんの方が「年間1ミリ」以上の被ばくをしています。その場所を、本当に子どもに「いい場所」とすることが必要です。それができないと、負の遺産が積みあがってしまいます。

——どうしたらよいのでしょうか？

力で風評被害をなくそうとしても、無理が残るばかりです。不信感が問題なのです。本当のことをきちんと周知して、そのためのコストも負担して、合意形成をすべきだと思います。合意できる基準をみんなで話し合い、理解して不信感を払しょくするべきです。でも、現状、そうなっていません。このままでは、不信感は払しょくされないように思います。そして、不安は募るばかりなのです。

ではどうしたらよいのか。マイナスからスタートしている私たちの街を、どうしたらよいのか、と真剣に、目を背けずに、問題と向き合うべきだと思います。ゴールすら見えない現実を見据えるべきです。その現実を踏まえて、「福島に行けばこんなに素晴らしい」ということになるかどうかには挑戦しなければならない。

私たちの団体は、NPO法人格を取りました。それは、これからは市や県を巻き込まないとだめだと考えたからです。キッズケアパークふくしまのような「こども遊び場」を増やしてほしい、時間を延長してほしいという声がたくさんあります。県が、市が、それぞれの立場で協力してくれれば、子どもたちの良い遊び場は増やせます。これまでの実績から、その可能性は手元にあると確信しているのです。心配のある人には、話し合う場を提供しながら活動を広げていきたい。

私たちの遊び場では、「心配をしている人」が安心して心配を語り合えるようにしようとしています。毎回アンケートを取るのですが、参加家族の半分程度は、今でも放射能に不安を感じておられます。その現実にはきちんと向き合う遊び場を、これから展開していきたいと思っています。

実際に生活している人は、ここに「いる」のです。その人たちと共に生きることが、結局、全てなのだと思います。政策を変えていくことは、とても大切です。それと同時に、草の根の活動を広くつなげていくことが大事だと思っています。

写真左側が野村先生、右側が栗原さん



東北ヘルプは、2011年以來ずっと、「青森から福島まで」の被災地の支援に携わらせていただけてきました。7年の月日が経つ中で、青森のプロジェクトは終了し、岩手のプロジェクトも「ハートニット・プロジェクト」のお手伝いだけを残すばかりとなっています。

今回、ハートニット・プロジェクト事務局の松ノ木さんに「8年目の被災地」というテーマで、現状報告をいただきました。以下に、ご案内いたします。

(川上直哉 記)

ハートニットが8年目を迎えるにあたって

ハートニット・プロジェクト事務局

松ノ木和子



全国から毛糸をご寄付いただき、それを用いて津波被災者の皆さんに編み物を作っていたいただいて、全国のバザーなどで販売をしていただくことで、被災地各地の一人お一人が自立に向かう——そういう働き（ハートニット・プロジェクト）を続けて、7年がたちました。このような形態で、このような広がりをもって社会貢献に繋がるとは想像すらしていませんでした。ボランティアが誰一人欠けても成し得なかった道筋だと思います。ここまで育った支援活動としてのハートニットがこの先の終着駅を見据えて、その歩みを方向つける時期が近づいています。今、「8年目の被災地」を見据えて、私たちの現状と展望を記します。

* * *

被災者お一人お一人が綺麗なランディングをする、そのための道をひとつに集約することは、難しそうです。アミマーさんお一人お一人の環境や取り組み姿勢も様々です。その状況を踏まえて、さらに我々ボランティアの体力と器をわきまえつつ、その最善の道が敷けたならば、ボランティアと多くの支援者の皆さんの心も救われると思われます。

その道を見つけるために、組織全体の状況を考慮し新しい段階へと進み始める時期が、もう来ていると思います。事の始まりが前代未聞の震災ですから、その終わ

り方についても「最善の方法」はないかもしれません。そう覚悟する中で、被災者のお一人お一人に多少なりともこの関わりによって何か心に届くものを残せたら、と願って、終わりを見据えた新しい段階への一步を踏み出したいと思っています。

その手始めとして、被災者のお一人お一人が今現在の置かれている状況、編み物に対する比重、今後の生活の見通しなどを聞き取るため、お一人お一人を訪問させていただき予定です。状況は千差万別と予想されます。ただ、おかれている立場は違っていても、きっと心の何処かにしまったものは共通だと思います。その辺りをことばだけでなく、お目にかかることでそれを感じて来たいと思います。

ハートニットにかかわるボランティアのみなさまには、既に余力というか力の限界も見えています。その実態を受容していただきながら、素敵な終わり方を、一緒に見つけたいと願うところです。

* * *

ハートニットの活動は、しかし、展開を続けています。たとえば、ある地域の被災者の皆さんについては、メーカーの仕事をお願いさせていただくことができそうです。編み物職人としての取引が確実なものとなりますように、今後ともしっかりとした関係が培われますよう、努めてまいります。たとえば、〇地区のYさんは、取次業務をもうしばらくお手伝いする必要がありそうです。先方とのビジネスの取引が不慣れのようなので、だんだんご自身でできるように応援します。

またすでに、ある業者さんの専属として安定した仕事を得られている方々も、別の地域におられます。そのケースでも、デザインを生み出すレベルにはまだまだ届いていないのが現実です。これに関しては、当初からお手伝いくださっている編み物の先生のご助力・ご負担が欠かせません。先生には感謝を深めるばかりです。

また、この活動によって編み物の奥深い興味と、流通の喜びを知った方々が自ら個人サロンのオーダを取ってお仕事なさる、など、積極的に新たな道を歩んでいただけたらなら、どんなに素敵だろうと思っています。アミマーとしての趣味と実益の魅力を知った方に、できるだけ良い糸を届け、ご自身でのビジネスをお薦めしたいと思っています。それに伴うアドバイスやサポートがあるかをこれから模索してまいります。

以上が今事務局で考えうるところです。引き続き、みなさまそれぞれの立場からご意見・指導を頂ければ幸いに思います。 (了)

津波の被災地で、恵み豊かな神様の働きを

アンディ・ギルバートさん・ローナ・ギルバートさんご夫妻は、女川で被災女性を支援する「恵プロジェクト」を続けておられます。ギルバートさんに、「8年目の被災地」で見えている課題について伺いました。

(聞き手：川上直哉)



——自己紹介をお願いします。

米国で牧師となり、福音自由教会の宣教師として日本に来ました。2011年まで12年間、福岡で活動していました。2011年3月25日に初めてボランティアで宮城県に来ました。その後、6月に福岡から引っ越しをして、今は石巻に住んでいます。女川で月二回（第一金曜日と第三日曜日）集まり、祈祷会などを持っています。

最初は石巻市渡波（わたのは）地区でいろいろなクリスチャングループと協力して「Kizuna Friends」というチームを作り、皆で泥出し・炊き出しなどをしました。2012年夏に女川町の状況を知り、祈り始め、女川町内のすべての道を歩いて神様の導きを求めました。

——「恵プロジェクト」発足の経緯について、教えてください。

ある日、一人の津波の被災者と出会ったことが始まりでした。彼女の趣味は、着物のリメイク品を作ることでした。祈りの中で、ビジネスを始めなければならないという思いを強くしていた私たちは、彼女の趣味を展開できないか、模索を始め、2013年、他の宣教師を含めた3人でプロジェクトを始めたのです。同時並行して「仮設住宅活動」「英会話」「子ども会」をしていましたから、その一つとして「恵プロジェクト」を展開することになりました。

——「恵プロジェクト」の現状と、その課題は？

今、8人の被災者の女性の雇用を生み出しています。月曜日だけお休みにして、10時から5時まで、女川駅前のプロムナードにお店を開いています。それから、オンラインショップが好評です（※「恵プロジェクト」と、ネットで検索ください）。

美しいホームページが見られます)。18か国の方がお買い上げくださり、リピーターになってくださっています。今は、日本国内で購入してくださる方が増えればと願っています。

課題は、風化にあります。最初は皆さん、「応援」ということで買ってくれました。でもだんだん、津波の記憶は風化します。そうした中で、私たちも将来を見えています。「神様の愛」あるいは「聖書の教え」を原理とした任意団体を維持して、女性のエンパワーメントのために働きを続けたいと願っているのです。「恵プロジェクト」という名前のおとおり、「めぐみ」という言葉に込められた「神様の恵み」に支えられて、「神様の恵み」をあらわす働きとなっていきますように、願っています。



Sterling Silver Earrings
スターリングシルバーピアス



Kimono Earring and Necklace Set
着物ピアスとネックレス
セット

東北ヘルプの「民生支援」の働きは、多くのソーシャルワーカーのお力をお借りして初めて成り立っています。お力をお借りしている多くの方の中で、特に頼りにさせていただいているのが「ライフワークサポート 響」代表の阿部泰幸さんです。いつも現場に張り付いて奮闘している阿部さんに、「8年目の被災地」について、語っていただきました。（聞き手：川上直哉）

「8回目」の3・11を迎えて（阿部泰幸さん）

——「8年目の被災地」について、思うところを教えてください。

東日本大震災が発生して8年目の被災地に立って、考えています。震災が発生したのは2011年3月11日だったけれど、それ以前の制度や慣習が、震災後、被災者の自立を妨げているのではないのでしょうか。この被災地には「人的災害」が日々、いつも、のしかかっているのです。私は、今の「8年目」の被災地を、「8回目」の被災地だ、と、数えるようにしています。

2011年1月に支援団体「ライフワークサポート 響」を立ち上げて活動を始めました。被災者に寄り添い抱える問題の解決へと伴走することと、そのために行政を動かすことが、活動の二本柱です。震災前、すでに生活困窮者6世帯に伴走していました。そこに震災が起こったのです。私はすぐ、これは後々、貧困問題に発展するぞ、と思いました。そして、そうってしまった今を目の前にしているのだと思います。

——「活動の二本柱」のなかで、これまでに印象深かったことは何でしょうか。

まず、過去に26名の車中生活者の個別直接支援を行ったことを思い出します。2011年夏のこと、まだ被災者は仮設住宅の建設が始まったばかりのころです。当時、被災者は半年もの長い避難所生活を余儀なくされていました。

避難所に支援物資の配布に行ったとき、1台の車の後ろでお弁当を食べている老夫婦を発見しました。「認知症のみのお父さんが夜中に奇声を発し周りに迷惑をかけるから車の中で生活している」とのことでした。その当時すでに福祉避難所が開設されていましたが、その存在すら知らされていない現実がありました。こうしたケースのように、当時、何人もの車中生活者がいたのです。私はその日から市内の避難所を周り車中生活者の調査をし、ひとつひとつ支援を行いました。

残念なケースもありました。高校生の少女が犬猫とともに一人で車中生活を続けているのを発見した時のことです。弁護士と一緒に、この少女を差別しないで避難所に受け入れるよう、行政に申し入れをしました。その時、行政から発された言葉は衝撃的でした。

た。「高校生にもなれば自分で判断できるだろ」と、担当者は言ったのです。私たちは大きな怒りと行政の限界を感じました。それでもあきらめず、行政担当者に執拗に対処を迫って、どうかこの少女は無事に仮設住宅に入れた、ということがありました。

行政の限界を前にして、支援にかかわる政策を変える必要を覚えるようになりました。多くの方々の協力を得て、二つの政策を変更させることができたことは、印象深く思っています。

具体的には「被災者の医療費助成延長」と「災害公営住宅の家賃補助の延長」です。2012年に打ち切られた医療費助成は、宮城県内9つの市町でその延長を実現しました。家賃補助は、気仙沼で「入居後10年間の補助」が得られることになりました。このほかにも、まだまだたくさん、被災者のために変更しなければならない政策があります。仲間と共に、努力は続いているのです。

——現在、活動はどのように展開していますか？

これまでの支援者数は延べ2万人を超えています。今は、月10件ほどの新規相談があり、今日（2018年3月14日）現在は、9件の相談に寄り添い支援しています。その内6件は1年以上かかわり続けているケースです。被災者の方々自身が訴えておられる「痛み」と、その「原因」が乖離していることがしばしばあります。そうした中で行政と交渉する・議論する必要が生まれるのですが、そこにハードルを感じる方が実に多い。そうした方々に伴走しつつ、支援させていただいた7年間でした。

一例をあげましょう。生活に困窮していて、食事にも事欠いている母子家庭の方がいました。「生活保護を一時的に使う」という解決法があるのですが、それでは「ダメな人間」になってしまう、という先入観が、そのお母さんにはありました。加えて、役所の窓口では、保護を諦めるように説得されてもいました。このケースの場合、2週間かけて急場の解決につなげることができたのですが、その最初の1週間は、この方と毎日会って、丁寧にお話を聞いていました。そうして少しずつ、でも確実に、「今すぐすべきこと」を整理していきました。そしてこの家庭が自立するまで寄り添い自立を果たしたケースでした。

——どうやって、この活動を維持していますか？

そもそも貯金を使っていましたが、それは2012年になくなってしまいました。赤い羽根共同募金会から一度だけ180万円の助成を得たのですが、それ以降、どこからも助成を得られずにいます。現在は募金で活動を継続していますが、その募金も、昨年は年額で100万円にも満たなかったのが現実です。

「8年目」は、しんどいだろう、と思っています。被災者から寄せられる相談が、減らないのです。その上、深刻化しています。自立できない人々の、取り残された苦悩がそこにある。貧困だけの問題ではないのですね。長く人に支配され、人権の蹂躪に我慢を重ね、ついに限界が来て助けを求める、というケースも、増えつつあるのです。

これからいよいよ、問題は深刻になります。本来、国や行政がそこに手を差し伸べるべきですが、できない現状もあります。それで、活動資金を稼ぐための活動を始めました。募金だけではどうにもならないので、被災地内で集まった材料を使いアクセサリーや雑貨を制作し被災地の隠された現状を訴えながら販売して資金を得ています。そうして自分の睡眠時間が削られているのが、悩みの種です。



「3・11」の津波に磨かれたガラス＝「シーグラス」を用いて作成されたアクセサリー
【ご購入の際は、次ページをご覧ください】

——今、伝えたい思いは、何でしょうか。

「復興」という。その意味を取り違えていませんか？——ということです。街が出来上がり、そこに人が戻ることが復興ではない、と私は考えています。被災された人一人一人が幸せな暮らしを手に入れて、はじめて「復興」と言えるはずです。そこを勘違いしてしまうと、大きな間違いを犯してしまいます。

外から見て「もうこれで復興だ・自立だ」と思われるかもしれませんが、新しい暮らしを手に入れることで起こる苦しみがあるのです。災害公営住宅に住む被災者の8割の方が70歳を超えています。その被災者が、防災集団移転と言われ、山の中に災害公営住宅を建てられ、自動車なしには暮らせない生活を強いられている現実があるのです。災害公営住宅で暮らす多くの高齢者は、車を所有していません。世間から隔離された復興の、ありえない現実がここにあります。

そうした現実を見て、多くの人に、考えてほしいと思っています。

(了)

おわりに

「8年目の被災地」に、どのように立てばよいのか。その問いを携えて、岩手から福島までお話を伺ってまいりました。ある理論によると、人間の細胞は「7年間」でほとんどすべて入れ替わる、のだそうです。もしそうだとすれば、「8年目」の被災地になお立ち続けるお一人お一人、そして、その支援者を応援し続けてくださるみなさまの思い一つ一つの、何と貴いことかと思えます。奇跡が、そこにあるのだと、そのような思いを強くしました。

現地と密着し、全国と直結して、被災地と支援者をつなぐネットワークである東北ヘルプは、この「8年目の被災地」特集をまとめる中で、新しい展開へと一歩進み始めました。事務局長である川上は、2018年4月から、日本基督教団石巻栄光教会に主任担任教師（主任牧師）として着任します。石巻地域には20を超えるキリスト教支援団体が活動を続けています。その輪の中に入れていただき、広く被災地全域により緊密な連携をもたらすこと。そうしたビジョンを、事務局として抱えています。

その最初の一步として、「ライフワークサポート 響」の阿部さんの働きを、昨年ご紹介した「シャロームいしのまき（べてるの風）」の大林さんと接続し、協働を開始していただくことができました。「べてるの風」の商品ホームページに、阿部さんのシーグラスの商品を掲載いただくことができました。これを第一歩として、協働の実りを豊かにして行きたく願っています。引き続きお覚え頂ければ幸いです。

(2018年3月19日 川上直哉 記)



左：石巻の福祉事業所「べてるの風」ホームページ画面（スマートフォン版）。「シーグラス」のアクセサリーは、こちらでご購入頂けます。

下：同上 QR コード



<https://shalom1.base.shop>



2018年3月18日
石巻栄光教会で、阿部さん(左)と大林さん(右)が会議を持たれました。



献金感謝

お支えいただきました。本当に、ありがとうございました。(東北ヘルプ事務局)

2017年11月22日～2018年2月28日 献金者ご芳名(敬称略・順不同)

IGL広島福音教会 KCCJ 広島教会 愛のいずみキリスト教会 笹川純子 相場郁朗 青柳芳明 青柳多香子 青山学院女子短期大学同窓会
 赤崎克俊 秋南教会 浅見真人 浅海幸弘 アジア学院 芦田政子 甘楽教会 有岡照子 遺愛女子中学高等学校 生島幹也 金沢キリスト教会
 池田五月山教会 池田中央教会 池田春善 石井智恵美 石巻栄光教会 板橋大山教会 社会委員会 市川三本松教会 小倉徳力教会
 市川三本松教会内いずみ会 伊藤まり子 井上和人 井上修三 猪瀬恭子 岩間節子 上野芝キリスト教会 上野緑ヶ丘教会 江川克巳・正美
 遠藤和子 大井美歩 大垣教会 扇町教会 大倉一美 大阪YWCA 大阪栄光キリスト教会 大阪福島教会 大友孝子 大曲ルーテル同胞教会
 大宮共立教会 大藪博康 岡崎茨坪伝道所 岡山教会 尾崎照子 尾関幸子 小幡正 東洋英和女学院学院長 伊藤美奈子 各務原教会
 鹿島幼稚園 葛城キリスト教会 加藤啓子 金谷幸尚 鴨東教会 軽井沢追分教会 河内常男 川上純平 川上新一 渡辺滋子 池田教会
 川崎境町教会 河野昌子 岸田清実 北柏めぐみ教会 北里洋 木村雄二・珂珂子 木村洋一郎・すげみ 行田教会 清水芳志雄 和戸教会
 京都上賀茂教会 京都教区京都南部地区 京都中央チャペル 旭東教会 金南植 久遠基督教会 釧路キリスト福音館 久世教会 国兼光子
 神戸改革派神学校 神戸聖愛教会 神戸多聞教会 御器所教会 国際基督教大学教会 小西美津代 小林和代 小松原勇 崔正剛 森みゆき
 在日大韓基督教会堺教会 酒井徳次郎 坂戸キリスト教会 櫻井志穂子 佐々木秀子 札幌教会 札幌桑園教会牧師 河野行秀 塩田瑞代
 シオン幼稚園 静岡教会 静岡草深教会社年会 渋谷教会 島田巖 島田祥子 清水恵子 市民クリスマス in 千葉 実行委員会 四條町教会
 下北沢ナザレン教会 下館教会 社会福祉法人 高倉ひかり保育園 理事長 中島幸一郎 宗教法人 国際シャローム・キリスト教会 首里教会
 頌栄幼稚園 母の会 尚綱学院高等学校(生徒会) 尚綱学院大学 宗教部 湘南教会 新生釜石教会 巢鴨聖泉キリスト教会 杉並教会
 鈴鹿教会 鈴蘭台教会 須磨教会こどもの教会 住田恵司 聖愛幼稚園 聖愛幼稚園保護者会 聖学院教会 聖ミカエル教会 聖和会新井教会
 関山幸代 世田谷中央教会 瀬戸昭 仙台白百合女子大学学生会 善通寺教会 高橋雅絵 高橋稔・みどり 竹本栄子 ダニエル・ヘラー
 千歳船橋教会 千葉あつ子 千葉教会 中部ディアコニア支援委員会 鶴川教会 天使幼稚園 土居理也子 東京恩寵教会執事会 若月学
 東京都民教会 同志社教会 所沢市民クリスマス実行委員会 中川みち子 中島隆宏 中田一夫 中津福音キリスト教会 中山信一・朝子
 勿来教会 名取教会 南光台キリスト教会 西新井教会 西千葉教会 西那須野教会 西宮一麦教会 西牧夫・あゆみ 似田兼司 佐渡教会
 日本基督教団東北教区放射能問題支援対策室 日本基督教団兵庫教区教育部女性委員会 日本聖公会東北教区仙台基督教会 友愛幼稚園
 日本ナザレン中野教会 北村篤生 日本バプテスト目白ヶ丘教会 日本福音ルーテル健軍教会 芳賀慶治 函館相生教会 橋本富子 長谷川正一
 花園キリスト教会 羽野浩雪・環 林起久子 原科浩 原宿教会子どもの礼拝 原町教会 春名克容 番町教会 東美教会 聖ヶ丘教会 日高詩織
 日野神明キリスト教会 ひの木教会 日原広志 ひばりが丘教会 平井純子 平田清子 弘前教会 広島キリスト教会 福岡城南教会 村山正治
 福岡南キリスト教会 福山天使教会 伏見東教会 富士吉田キリストの教会 藤原俊樹 府中中河原伝道所 古川幼稚園 古谷圭一 濱地正枝
 フロイラン・エーリック・規子 弁護士 太田伸二 辺見トモ子 星野房子 細井孝江 保田猛 堀口玲子 牧甫 幕田君江 松本教会 松本設子
 松本芳哉 道本純行 南甲府教会 南山教会 宮井武憲 宮坂信章 宮崎昌久・せい子 宮崎正美 武蔵豊岡教会 村瀬義史 室町教会
 室蘭教会 門司大里教会 薬田台教会 安武知子 山形ウリ教会 山田みき 山梨教会 及川信 山元彩子 友愛チャペル 小坂井勉 渡邊信
 有限会社ヨシュア 柚之原寛史 横須賀教会 横浜上原教会 横浜海岸教会 横浜港南台教会 横浜指路教会 由木キリスト教会 吉田朋子
 世の光キリスト教会 ヨハン東京キリスト教会 ヨロコピケンキュウカイ 日本コイノア福祉会 理事長 安田信人 ルーテル健軍教会女性会
 六角橋教会 在日大韓基督教会京都教会女性会 鹿児島加治屋町教会 恋が窪キリスト教会 新座志木教会 内田公子(高木澄子)様・樹弥子
 匿名(多数)

【献金件数・献金額の推移】

2015年1月1日～12月31日	： 629件	17,973,940 円
2016年1月1日～12月31日	： 692件	14,465,518 円
2017年1月1日～12月31日	： 750件	12,491,525 円

付記

今回のイースター号には「扶助基金」の報告を企画していましたが、担当者(地域の顔役の方)が病を得られ、入院などされましたので、次回に持ち越しました。ここにも「8年目の被災地」の現実があります。お覚え頂きお祈りください。幸いです。

(東北ヘルプ事務局)

収 支 計 算 書

NPO法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

自 2017年 4月 1日

至 2018年 2月28日

(単位：円)

会費収入	(正会員・協賛会員 合計21件)	66,000
献金収入	(教会・団体・個人 合計292件)	10,670,599
その他収入	(預金利息等)	3
収入計		10,736,602
給料手当	(職員給料手当・退職金を含む)	3,220,850
法定福利費	(社会保険・労働保険)	394,102
新聞図書費	(書籍代)	65,849
通信運搬費	(電話・郵便・運賃)	564,239
賃借料	(コピ-機・レンタカー)	87,324
支払手数料	(銀行手数料)	80,040
外注費	(社労士等)	653,400
消耗品費	(10万円未満の消耗品)	50,129
事務用品費	(10万円未満の文具等)	393,415
広告宣伝費	(ニューズレター等)	422,706
租税公課	(償却資産税・印紙等)	7,200
旅費交通費	(高速代・JR券代等)	1,827,495
燃料費	(ガソリン代)	321,001
地代家賃	(家賃・駐車料)	330,000
会議費	(会食代・会場代等)	77,790
雑費	(その他経費)	354,017
支援費	(訪問傾聴・短期保養・その他支援)	1,452,286
支出計		10,301,843
当期損益金額		434,759
前期繰越損益		1,268,173
次期繰越損益		1,702,932

2017年度(2017年4月~2018年3月)は、
1200万円の予算を組んでいます。

2017年2月末時点での進捗率は、以下の通りです。

1. 日数=12か月分の11か月=91.7%の進捗時点で、
2. 収入=1200万円に対して10,736,602円=89.4%
3. 支出=1200万円に対して10,301,843円=85.8%



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団仙台北三番丁教会担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師・扶助基金実行委員会委員長）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北郡山キリスト福音教会牧師・ふくしま HOPE 代表）

理事 金子千嘉世（日本バプテスト連盟郡山コスモス通りキリスト教会牧師）

監事 小西望（日本基督教団仙台北教会主任担任教師・日本基督教団東北教区総会議長）

監事 本村大輔（救世軍杉並小隊長）

※肩書等は、すべて2018年3月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP

Per crucem ad lucem（十字架を違って光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6 食品放射能計測所「いのり」気付 ※住所が、変わりました。

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com